

## 走る

わたしは走る  
夜明け前の道を  
息をきらしながら

わたしがわたしであることは  
瞬きをするくらい簡単なことだったのに  
あの遠い曲がり角で何かを落としてしまった  
わたしは誰  
今ではもうわからない

それでも  
わたしは走る  
汗をかきながら

どうでもいいように転がっている石ころも  
ここに咲いている花も  
意味があると信じたい

風がわたしの髪を頬を唄うようにそっと撫でる  
小鳥を森へ返すように  
手のひらを放すと風にほじめて  
遠い空へ飛んでいったもの  
それはわたしの心

追いかけるように  
わたしは走る

## 宇宙のはしっこ

駅のざわめき 暑苦しさの中  
交差する人々 急ぎ足  
呼び止めようとしたわたしの声を  
アナウンスが掻き消していく  
層気楼のように遠のいて  
取り残されてぼっかり穴が開く  
誰も皆行くべき場所があつて  
わたしだけ行けない  
誰も教えてくれない

列車はやって来てまた去っていく  
変わりなどいくらでもいた  
誰でも良かった  
それなのに  
何かを待っていた  
誰かを待っていた  
何処にいるのか何処に向かうのかわからずに  
気がつくところにいるだけで

人込みの間からかろうじて見つけた半分だけの空  
こんなにも宇宙のはしっこで  
何者でもない 誰も知らない

遠くの星は何億年も前の光を届ける  
昔の誰かが託した小さな命 一つ

## 小さい人

悪い子だから謝りなさいと言われ  
口を固く結ぶにも  
背を向けるにも

この人にはこの人の理由がある  
この人も小さいが人  
所有するものを奪ってはいけない  
踏みにじつてはいけない  
僕にいつからたいそうな権利があっただろう  
ふとこの人の冷たい小さな手を思う

立ち止まり  
立ち返り  
振り向いて  
途方に暮れる

走っても走っても届かなかった夕焼けは  
ただ 美しかった  
空は透明でそれだけで十分だった  
世界は手のうちを見せずにいたが  
優しく包み込んでいた

一つ知る毎に風に流されてゆくものを  
転んだ時の痛みを我慢する度に目を伏せてきたものを  
留まることも 戻ること  
手を伸ばしても 触れることもできない

いつの間にか  
難しい教式を解き  
政治を語り  
それらを積み木のように重ねることに夢中になった

どうして人を好きになるの？  
どうしてわざと意地悪をするの？

小さい人の難問に僕は亡骸のようになって  
それから  
崩れ落ちてゆく音を聞いた  
せめてこの人の言葉に震え迷い続けよう  
愛おしい風 柔らかな匂い